
記憶になった日常

氷柱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶になった日常

【Nコード】

N7600Z

【作者名】

氷柱

【あらすじ】

ブイズ達の日々の日常を描いた物語

ほのぼのでもふもふな生活を一緒に過ごそうよ♪

（キャラ紹介）（時折更新）

ブースター♀…ストラ

あだ名は『スウ』。

皆のまとめ役。皆からはどこかに彼氏がいるんじゃないかと疑われ

ている。

サンダース♂…ライト

殆ど呼ばれることはないが、あだ名は『ライ』。

むじゃきな性格のため、いつもトラブルを引き起こす困り者。

シャワーズ♀…アクア

ひかえめな性格の女の子。ライトの事を妙に気にかけているようだが…？

ブラッキー♂…ルナ

アルトの彼氏。いつも冷静でバトルも強いため、ストラに次ぐみんなの頼りの存在

エーフィ♀…アルト

ルナの彼女。家事全般が全く出来ず、その面ではライトに次ぐトラブルメーカーとなっている。

リーフィア♀…リーフ

一部の間からのあだ名は『リイ』

いつも快活で語尾に♪マークがつくことが多い。笑いながらいじめることがあるドSな性格でもある。

グレイシア♂…レイク

恥ずかしがりやで何時もリーフにからかわれている。若干 男の娘なため、他のメンバーからもしじられることが多々ある。

「クリスマスだ！クリスマスウー！」

「正確にはクリスマスイブだけだね。」

はしゃぐサンダースと冷静に突っ込みをいれるブースター。

「今回こそサンタさんがプレゼント出来ないようなものを考えてやるうー！」

Yahooo!とわめきながらサンダースは部屋を疾走してそのまま外に飛び出して行った。

全く…朝からよくあんなに元気だね。

はしゃいでいるサンダースに呆れていながらもブースターもクリスマスを楽しみにしていた。

「前回の様にならなければいいけど…」

やれやれとでもいうように首をかしげてブースターは自分の部屋に戻って行った。

ーーーーー。

「アゝクウゝアゝ！」

「うん？」川の中で優雅に朝の水浴びをしていたシャワーズは自分の名前が聞こえてきた方を向いて見る。

すると、此方に向かって猛スピードで走ってくるサンダースの姿が…
「ストップ！ストップだつて！」

アクアの必死の制止もサンダースには聞こえなかったようだ。
サンダースはそのまま川に体ごと突っ込んだ。

「キヤーッ！！！」

川に電流が流れてアクアは感電してしまう。

「あつ！ゴメン、ゴメン！」

サンダーズは川の中に突っ込んでからようやくその事に気付いたように急いで川の中から出てくる。

アクアもその後に這いずりながら川の中から出てくる。

「ううっ…。ライ…。朝からそんなにはしゃいでどうしたんですか？」

地面に顔を突っ伏しながら尋ねてくる。

「何って今日はクリスマスだよ！ 夜にはサンタさんが来るんだよ！」

「そういえば今日はクリスマスイブだったね。でも夜までまだ時間はあるよ？」

そう、今日は12/24 クリスマスイブの日。

夜にはサンタさん…。まあ、デリバードさんがプレゼントを運んでくれるんだけど ライトは毎回はしゃぎ疲れて寝てるんだよね…。だから今でもサンタさんの事を信じてるみたい。

「今回は何を頼むの？ 前回はたしか1つの鉄球だったよね？」

そう、前回ライトは1つの鉄球をサンタさんに頼んでいた。

本人曰く、『サンタさんはトナカイで空を飛んでやって来るんだ！

だったら相当重たい物を頼べば空も飛べなくなる！』とのこと。

翌日、ベッドの傍に掛けていた靴下は無惨にも破れ、その下の床には穴が空いていた。ライトの部屋は2階にある為、その真下にある1階のストラの部屋が落ちてきた鉄球によりかなりの被害を被っていたんだよね…

「そうなんだよね。前回は重要な事を忘れてたんだよ！ 飛べなくても雪の上を滑っていけばいいんだ！」

いや、突っ込みどころ満載なんですけど！

「それより…」

ライトは先程から突っ伏しているアクアにズイツと顔を寄せる。

「さっきはゴメンね。その…。やっぱり痛かった？」

いままでのむじゃきな感じと違って変わって今度は両前足を顔の前でモジモジさせている。

「そつ、そんな事ないよ！ 確かに痛かったけど…」
アクアは慌てて顔を上げて応えるが、流石に先程の電撃は痛かったのか顔をしかめる。

「やっぱり？ ちょっと待ってて！ オレンの実とってくるから！」
「えっ！？ 別にいいよ！」

アクアの言葉を聞く前にライトは森の方に走り去ってしまった。

「別にいいのに…。それにしてもさっき、ライの顔近かったなあ…
…って、何考えてるんだろわたしノノノ」

いつの間にかライトとのやりとりを思い出していた自分に気付き、
アクアは顔を赤らめながら首を振る。

「……………」

「この位でいいかなつと」

リーフィアはくわえていた木の実を置き、上機嫌で呟く。

此処は『緑採りょくさいの森』。

木の実をはじめ、薬草や貴重な種など様々な食料や素材が採れる場所だ。

森の中央辺りは少しあけた場所があるので、そこでバトルやイベント等のもようしものをやったりする。

「皆が好きな味の木の実は採ったし、そろそろ帰ろうかな」

木の実を下に敷いていた葉っぱで軽く包み、持ち帰ろうとした時
聞き慣れた声が耳に飛び込んできたので目を向けると…

「オレンの実ッ！」ライトが土煙をあげながら走っていた。

「おい！ ライトー！ どうしたの？」

リーフィアが傍を通過しようとしたライトを呼び止める。

「あつ！ リーツ、フ！ オレンのみつ、持っていない？」

ライトがぜいぜい息をきらしながら尋ねる。

「そんなに慌ててどうしたの？ もしかして、誰か怪我したの！？」

走ることが得意なはずのライトがこれだけ息をきらすほど急いでいるということは、余程のことがあったのだろっ、リーフィアのリーフは目を大きくあけて驚いている。

「ああ、アクアに怪我させちゃったんだ！」

「えっ！？ アクアが！？」

「とりあえず、早くっ！」

リーフは木の実を包んだ葉っぱをくわえて 走っていくライトの後を追った。

「……………」。

「ライト、大丈夫かな……」

アクアはライトが戻って来る迄 水に入って体を癒していた。

アクアは自分のことよりも、ライトの事を心配していた。正確にいうと、ライトがまた誰かに迷惑をかけていないか心配しているように、ライトが走り去った森の方向を何事も起こらないように祈りつつ、ぼお～と眺めていた。

そして、数分の後にはまた黄色いものがこんどは此方に走ってくるのが見えた。

「うそっ！？ もう戻ってきた？」

此処からあの森まで 約5キロほどあるというのにライトはもう戻ってきたようだ。

そして、その後ろには緑のものも見える。

「ゴメン！ 待たせた！」

「アクア！ どこケガしたの！？」

ライトはアクアの前に滑り込みながら止まり、リーフも傍に木の実を置いて顔を近づける。

「えっ？ リーフまで？」

神様、悪い予感が当たったようです。ライトは早速、他人に迷惑を

かけてしまいました！

「ライトがアクアがケガしたっていったの。何処が痛むの？」

ライト…また何か勘違いさせること言ったようだね。

「いや、別に…そこまでたいしたケガじゃないよ…。実は…」

アクアはライトとの事の経緯^{いきさつ}を話す。

「なあ…んだ。って、またアクアに迷惑かけてたの？」

「うつ…ごつ、ゴメン…」

「別にいいよ…」

これも何時ものやりとり。

サンダースがはしゃいで誰かがその興奮状態の体にあたり、感電する…電気に弱い水タイプだから他のメンバーの中でも私が被害をうけることが多い。

「とりあえず…ハイツ♪オレンの実。」

リーフが集めた木の実の中からオレンの実を探りだし、渡してくれる。

「あつ、ありがとう…」

なんともないといったが、体は全身 針で刺されたように痛むので素直にオレンの実をかじる。

モグモグモグ…。

体のだるさと痛みが少しひいていく。

「ふう…、ありがとう。だいぶ楽になったよ。」

アクアは水をしたらせながら川の中からあがつてくる。

「よかつた♪」アクアに危険なことが起こってなくて。」

アクアが川から上がってくるなりリーフはアクアを抱きしめる。

「ちよつと…リイ」

「べつにいいじゃん♪」

そばではライトが気まずそうに俯いている。

「あつ、そろそろお昼御飯の時間じゃない？ 家に戻るっ？」

この状況を打開するためにアクアは話をきりだす。

「う…ん、そうだね♪そろそろ帰ろっか！ ほらっ、ライも帰るよ

！

「へっ！？あつ、お、おうっ！」

ライトは急に自分に話が回ってきたためあたふたしている。

リーフは木の実を包んでいる葉っぱをくわえ、ライトの前に置く。

「男の子なんだから頑張つてね」

「…………」。アクアとリーフは会話に花を咲かせながら楽しそうに歩いていた。

それに対し、後ろにはライトがついていったが口に物をくわえていたため何も喋ることが出来ず、ライトにとってはただの苦痛な時間ではなかった。

……………。

「つつ、着いた…。」

玄関に着いた瞬間にライトは倒れこんだ。

「お疲れお疲れ」

リーフは木の実を持って台所の方に向かって行った。

結構重たい筈なのに、軽々ともっていきやがった…アイツ♀だよな？ 何処にあんな力が…

サンダースは冬の寒気で冷えた床の上でそんなことを考えていた。

「ライト、こんな所で寝てたら風邪ひくよ？」

アクアが心配そうに尋ねてくるので 荷物運びで疲れた体を頑張つて起こす。

「わかったよ…。」

そう呟き、ライトはリビングにふらつきながら歩いて行った。

……………。

「お昼だよ」

ブースターのストラの声が聞こえてきた瞬間、疲れて寝ていたはず

のライトは飛び起き、食卓があるダイニングルームに走って行く。
食卓といっても“こたつ”だけど。

「飯〰️」

サンダースがダイニングルームに着いた時にはまだストラしかいなかった。

「やっぱり、今日もライが一番乗りだね。　じゃあ好きな木の実取って待つててね。」

ライトは“マゴのみ”を取ってこたつの中に入って頭だけをだす。
「やっぱりこたつは最高」。

サンダースが和んでいると、他のメンバーも続々と部屋にやって来た。

「えっ、もしかしたら私達が一番乗り？」

「バカな！今夜はホワイトクリスマスになりそうだな。」

「あれ〰️珍しい。ライト先に来てないんだ」

エーフィのアルトとブラッキーのルナ、リーフが入って来た。アルトとリーフはライトが先に部屋に来てない事に驚いている。

「既にそこにいますよ？」

今度はグレイシアのレイクとアクアが色々な荷物を持って部屋に入ってくる。

こたつの周りに敷かれている座布団の1つがふくれ、その端から耳が見えている。

「なあ〰️んだ、やっぱりライトの方が早かったんだね」

「もちろん！」

ライトは座布団の下から返事をする。

「これで皆集まった訳だし、お昼御飯食べながら午後の仕事の割り振りをやって行くよ。」

ストラも“フィラの実”をとって座布団に座る。

いつの間にかライトもこたつの中から出てきている。

「じゃあ、いっただきま〰️す！」

「……………」。

「じゃあ、先刻話した通りの仕事をみんなこなしてね。かいさ〜ん。」

ストラの一言で昼食を食べ終えたみんなはそろそろと部屋を出ていった。

…二匹を除いて。

「何で俺も残らなくちゃなんないんだよ…ブツブツ」

「まあまあ、つべこべ言わず、台所にレッツゴー♪」

文句をいいつづけるライトをリーフは台所まで連行する。

「あつ、止めるって／＼ わかった、分かったから！」

ライトは恥ずかしがって暴れるが、リーフの力には敵わずそのまま台所まで引つ張ってこられた。

「でも、何で俺が料理係なんだよ…他にも適任はいくらでもいるだろ…アクアとかスウとか…」

リーフが材料を取りに行っているため、いまは誰もいない台所で一人ぼやく。

俺も去年通り ツリーの飾り付けが良かったなあ…

去年のクリスマスの思い出に想いを馳せているうちにリーフも材料を持って台所に戻ってきた。

「ケーキは私を作るから、ライトはポフィン作りね♪」

「ムリ！ 無理、無理！絶対無理！」

てつきり料理の手伝いをするかと思っていたライトは全力で否定する。

「なぜばなるって♪」

「いや絶対なんないって！ 俺、料理作ったことないし！」

「わかんないよ？ ライトの前世、実は伝説のポフィンマスターかもよ？」

「何その無理矢理な設定！」

「ポフィンの作り方教えるからちゃんとみててね♪」

ライトの反論は受け付けず、リーフはポフィン作りの準備を始める。
「ここにある調味料を適当にいれて…」

リーフはあらかじめ準備しておいた材料をポフィンを作る鍋のような機械に入れ込んでいく…目分量で。

「次に木の実を入れる…」

木の実をそのままドボンと鍋の中に放り込む。

「そして焦がさないようにまぜまぜ…」

こぼれないのが不思議な位、高速で材料をヘラでまわしだす。

「なんとなく出来上がったと思ったたら出来上がり…」

そしてアバウトに終わった。

「これでライも立派なポフィンマスター！ イエイ…」

リーフはウインクしながら此方を指差してくる。

「あれ？ どうしたの？」

ライトは目を細めてリーフを見つめてる。

「今ので料理初心者が理解出来たら凄いよ…。」

ライトは嘆息まじりに告げる。

「なせばなる…」

話のもとに戻った！？ そして逃げた！

リーフは台所を飛び出して何処かに行ってしまった。台所に1人、とり残されてしまったライト。

「どうしよう…そうだ！」

ライトは何かを思いついたようで、急いで自分の部屋に向かうのであった…

「ライト…大丈夫かなあ？」

「僕は楽しみですけど…」

リビングではアクアとレイクがクリスマスの飾り付けをしていた。アクアは先程からライトの事が心配で台所に行こうかどうしようか迷っていた。

「ライトさんが料理するところは見たことありませんので僕も見に行きたいのですが…いまは飾り付けを先に終わらせましょう。」

「そ…そうですね。」

ライトもあんな風に見えて私よりもちゃんとしてるもんね、少しおっちょこちょいだけど…。

二人は暫く無言で飾り付けをしていく。

二人で窓の周りを飾り付けをしているところでアクアが唐突に話をきりだした。

「そういえばリーフさんとは上手くいつてるんですか？」

話をしだしたアクアを見ていたレイクの目は驚きで一瞬大きくなり、羞恥心からかすぐに目をそむけて飾り付けを再開する。

「レイクって面白い。リーフさんがいじりたくなるのもわかるかも。」

「…／／／／。」

レイクの青い頬もいまでは赤くなっている。アクアが笑いながらレイクを見ていると、レイクも飾り付けをしながら聞いてきた。

「そういうアクアさんもライトさんのことが好きなんじゃないんですか？」

「えっ！？ そっ、それは…」

今度はアクアが頬を赤く染め、たじろぐ。

「目が泳いでますよ？ それに僕は結構前から知っていましたし、いまさら隠さなくても…」

「えっ…。」

「だってアクアさんずっとライトさんのこと見てますからね。」

レイクが悪戯っぽくアクアに微笑む。

「皆に…言ってないよね？」

アクアがおどおどしながらレイクに聞く。

「別に皆、アクアさんがライトさんのことを好きなことは知ってると思いますよ？」

そっ、そんな！…じゃあもしかしたらライトにもバレてるの？

何故か自然に涙がこみあげてくる。

「どっ、どうしたんですか！？」

わからない。特に悲しいわけでもないのに涙がとまらない。
「ごめんなさい！ 悪ふざけが過ぎました！ だから、ほら、泣き止んで下さいよ…。」

レイクはアクアに近寄って必死に慰める。

こんなところ 誰かに見られたら…

レイクがどのように対処すればいいか困っていると、リーフがリビングに入ってきた。

うわっ、なんという バッドタイミング…。

「あれ、どうしたの？」

リーフが此方の異変に気付いたようで近寄ってくる。

ヤバイ…。

レイクは若干後退りする。

「りっ、リーフさあ…ん…」

「どっ、どうしたの！？ まさか…」

アクアがリーフに泣きつく。

リーフはこれの元凶と思われるレイクを睨む。

「ごっ、誤解ですって！」

レイクは激しく首を横に振り、自分の無実を証明しようとする。

「問答無用！ かぐごっ…！」

リーフはレイクに『はっばカッター』をくり出す。

「うわっ！」

レイクは手で顔を隠す。

しかし、いつまでたっても『はっぱカッター』による痛みは訪れず、おかしいなと思って手をどかすとリーフが目前まで迫ってきていた。

「くらえっ！」

「ぐっ！？」

リーフがレイクに『すてみタックル』をお見舞いし、レイクは飾り付け用の道具の山に派手に吹っ飛ばされた。

「やめて下さいリーフさん！ レイクさんは別に悪くありません！」

「えっ？」

アクアが二人の間に割ってはいる。

「実は……」

アクアは泣いていた訳をリーフに話す。

「……………」。

「なあ〜んだ、そんなことだったの？」

「そんなことじゃありません！／＼」

リーフの言葉でアクアはふてくされてしまう。

そうこうしているうちにレイクが道具の山から這いずりでてくる。

「結局 僕は殴られ損じゃないですか……」

先程の『すてみタックル』が余程 痛かったのか、まだ片手で胸の辺りを押さえている。

「ええ〜別に損してないじゃん！ レイクって私から苛められていっつもよろこんでんじゃん♪ だからさっきのも悦しかったんじゃない？」

「よろこんでないですっ！ それにリーの場合、うれしいの漢字が違っ気がします！」

レイクは急いで立ち上がり、弁明しようとしたが脚に照明ランプの紐が絡まり派手に転ぶ。

「うわっ！」

ドタン！！ガッシャーン！ガラガラガラ…

「ああゝあ。いくつか道具が壊れちゃったかもね。」

「うつつ…。」

レイクはもう立ち上がる元氣も無くなったようだ。床に突っ伏したまま呻いている。

「へえゝ、レイクさんってDMだったんですね。」

アクアのトドメの一言を聞いてついにレイクは力尽きた。

「…ところでさっきのことだけど別に気にしないでいいと思うよ？」

「何で…そう言いきれるんですか？」

「だって…」

—————。

その頃、台所では…

「ヘックシューーン！ あうっ…ズルズルズル。」

ライトがくしゃみをしていた。

「誰かが俺の事でも噂してるのかな…良い噂だといいいけど。」

ライトはポフィンを混ぜながら呟く。

「クリスマスかぁ…俺もそろそろ彼女ほしいなぁ…。」

アクアの気持ちも知らずにライトはポフィンを作っているのですた。

「みんなそろったね…。」

みんなで仕事を割り振った昼食の時間から あつという間に時間は進み、既に太陽はとつくに沈んで辺りは暗くなっている。

ストラは一通り メンバーが全員リビングに揃っているか確認している。

「じゃあ、始めようか！」

みんなは渡されていたクラッカーを準備する。

パンツ！

「あつ！」

そんななかライトだけがはやまってクラッカーを鳴らしてしまったようだ。

「ライトオ…。」

「いつもどおりだな。」

「空気読みなさいよ！」

みんなからのライトへの文句が部屋中を飛び交う。

「だってみんなクラッカー上げたじゃん！ 普通 鳴らすと思うよ！」

「でもライト以外だれも鳴らしてないよ？」

「……………」

リーフのもつともな意見にライトは何も言えなくなる。

「まあ、例年通りでライトらしいからいいんじゃない？ それにクラッカーならまだあるし。」

ブースターは白い袋の中からクラッカーをもう1つ取り出す。

「はいっ！」

「ありがと…。」

ライトは既に落ち込んでしまったようだ。しかたない…

「ていつ！」

「むぎゅっ!？」

ストラがライトの頬つぺたに両手を押し付ける。

「元気だすの！ 今日クリスマスなんだからみんなで楽しく祝おう?。」

そう言つてライトに微笑む。

「う、うん…ノノノ」

「じゃあ、気をとりなおして…メリークリスマス!!」
パンッ!

「おめでとぅ」

「イエーイ」

「おめでとぅございます。」

パンッ! パパン!!

みんなそれぞれの言葉でクリスマスを祝う。 ふと、窓から外を見ると外では雪が降り始めていた。

「あつ、雪だあ」

「やはりホワイトクリスマスに…」

リーフィアは窓に近寄つてしっぽをふりながらむじゃきに喜んでい

る。
「ところで今回はライトさんがポフィンを作ったんですね? 早く食べてみましょうよ。」

「さんせーい」

「本当に大丈夫なんでしょうね?」

「アルトよりはマシだと思っぞ…」

「何か言つた? ルナ?」

「何も?」

つめ寄るアルトにルナは適当にごまかす。そんなやりとりをみて笑いながらライトは台所の方にポフィンをとりに行く。

「でも、ライトって料理作ったことあるのか？　くどいポフィンや
くろいポフィンはごめんだぞ…」

「大丈夫！　ライトはポフィンマスターなんだから！」

不安に顔を曇らせるルナにリーフはどこか自信ありげに告げる。

「ライトってそんなに凄かったの！？」

「何いつてるの！　私より料理がうまいはずがないじゃない！」

「…接戦かもな。」

リーフの冗談をアクアとアルトだけは本気にしているようだ。

アクアは正直に驚いてるし、家事全般が壊滅的に下手なアルトは、
より料理が下手ということになるのだけは嫌なのかアクアに力説し
ている。

他の3人はそれぞれ欠伸をしていたりと冗談にはとりあっていない。

「でも結構いいにおいがしてきましたよ？」

レイクの言う通り、確かにどこからともなく（台所以外ありえない
が）　美味しそうなにおいが漂ってくる。

「だっかあぁー！　ありえないって！」

アルトはレイクの前でじたばたし始めている。　彼氏のルナはとい
うと、アルトの相手はレイクに任せたとでもいうように窓の前で雪
を見てるし…こっちみてよ…。

「まあ、食べてみてから判断したほうがいいんじゃない？」

困っているレイクにストラが助け船をだしてくれる。

「そうね…においがよくても味までいいって訳じゃないんだから！」
アルトはストラの言葉で納得したのかフンツとでもいいだけにレイ
クから首をそむける。

レイクが安堵のため息をついていると、ライトがポフィンが入って
いるのであるうバケツトをくわえて戻ってきた。

「お待たせ〜」

ライトがバケツトをテーブルの上に置くと、雪を見ていたルナとリ
ーフもテーブルに戻った。

「おっ、うまそう。」

ルナの一言にアルトがキツと睨みつける。

「もちろん、だってライトはポフィンマスターだもんね。」

リーフにもアルトは睨みつけているが、どうやらリーフは気づいていないようだ。ひかえめな性格のアクアに至っては黙りこんでいる。

「とりあえず食べてみてよ！」

ライトはみんなにポフィンを配っていく。そのポフィンは“金色”に輝いていた。

「気のせいかな？ 心なしに金色に見えるんだが？」

“まるやかポフィン”だね。」

「ライトすごい！」

「流石、私が教えただけあるわね。」

「凄いですね。」

みんなが口々にポフィンに対する感想を言っているなか、1人だけ黙りこんでいるのが…

「アルト？ どうしたの？」

アルトはショックが大きくて落ち込んでいるようにみえる。

「とりあえず食べてみようか！」

ストラがみんなよりひとあし先にポフィンを食べる。

「どう？」

ストラは数回 咀嚼そしゃくした後にかう言った。

「美味しいよコレ！ 僕は辛いものが好きなんだけど、他の味が辛味の邪魔をしてないよ！それに何より…辛味の中に旨さがある！」

「ぼく？」

ポフィンの味に感動したストラの感想の中でも、ライトはストラの一人称が気になったようだ。

「ん？ どうしたの？」

「いや、スウって一人称 “僕” だったんだ…と思って。」

「そっいえばみんなの前で “僕” って言ったことなかったっけ？」

そっだよ、一人称は“僕”だよ。イーブイには多いから周りで

僕っていう子が多いし、それで自然に…」

何も後から“私”に直してもいいじゃん…まあ、スウは“僕”でも可愛いからいいけど。

そついう事でライトも深くは言及しなかった。

「じゃあ僕も…」

レイクもポフィンを一口かじる。

「わっ、私も…」

レイクに続け、アクア達もポフィンを食べ始める。

「美味しいよっ！ ライト！」

「そう？ 良かった。」

ライトがアクアに笑顔を見せたため、アクアは恥ずかしがってまた黙りこんでしまった。

「うまい…」

「おいしい…」

みんながポフィンを食べ終わったなか、また1人落ち込んでいるのが…

「おーい、アルト？」

駄目だ…完全に魂が抜けきっているようだな…なむ。

彼氏であるルナ以外がみてもわかる位にいまのアルトは放心状態にあった。

「へえ、ライトがポフィン作るの上手いなんてね…今度僕にも作り方教えてよ。」

「私が教えよつか…」

「いや俺が教えるよ…」

実際、リーフのいうとおりについた訳じゃないし…。

「私も…」

アルトの魂もいつの間にか現世に戻ってきたようです。 自分が料

理下手なのを十分承知の上でライトに頼む。

「別にいいよ？」

「じゃ、じゃあ私も！」

この場に乗じて、アクアもライトに頼み込む。ストラやアルトだ
けか、ひかえめなアクアも頼んでくるとは思っておらず、ライトは
一瞬硬直する。

「だめ…ですか？」

「べつ、別にいいよ？」

アクアが上目遣いでライトをみる。ライトはそんなアクアにドキッ
としてしまい、顔を赤らめながらこたえる。

「おもしろそうだし私も…」

気付けば、メンバーの中の♀は全員参加ということになっていた。
なにっ！？もしかしたら僕の昼間のつぶやきが叶っちゃうの！？い
きなりチャンス到来です！もしかしてこれがクリスマスプレゼント
！？

ライトは最後に心の中で強く感謝した。

（グーグル先生ありがとう！）と…

くクリスマスイブな日常く 後編 12/24 (後書き)

くあとがきく

ライトさんはどうやらパソコンにてレシピをググっていたようです。
実はというとそのパソコンもクリスマスプレゼントで貰ったものだったり…

今年のライトさんは いったいどんなプレゼントを頼んだのでしょうか…

くクリスマスイブな日常　　おまけ（前書き）

デリバード（サンタさん）視点です。

ブイズ一家のクリスマスは今年も賑やかなようです（笑）

くクリスマスイブな日常く おまけ

「はあく、ぶっちゃけ超疲れた…。」

俺はいま両手をせわしなく動かしながらそらをとんでいる。

「なんでここら辺の住民は個性的な面子が揃ってるんだよ…」

俺は次の目的地を再度確認するためメモ用紙を取り出す。

「何回見ても変わるわけないか…」

ハアツとため息をつきながら俺は飛び続ける。どうやってその短い手で飛んでるかだって？ ハイジのお爺さんに聞いてこい！

数分後：

デリバードはある家の前に着いた。ちなみにこの家は昔、俺がプレゼントした家。ライトとかいうサンダーズが“ドーブル100匹によりデザインされた 家具付き、冷暖房完備、最新のセキュリティシステム搭載、お庭にプール付き…etc.の豪邸のような家が欲しい”と注文してきた。

よって、サンタさんクオリティにより実現してやった。

「今年も無茶な注文してきて…まあいい、入るか…」

俺は一度深呼吸した後に意を決して扉よこのインターホンを押そうとした…

瞬間

バンッ！

「いらつしゃいっ」

ビクッ！

扉が勢いよく開いて中からリーフさんが顔を出している。急な出来事に驚いて、変なポーズをとっている俺をみて リーフさんは嬉しそうにこついいながらまた家の中に入っていった。

「わっ！ かかった、ひっかかった」

「全く…」

そう呟きながら、俺は先程リーフさんが手を離したので　いまは閉まっている扉に手を伸ばす。

「すまん、うちのリーフが…」

ゴンツ！と鈍い音がして俺は倒れる。

「すまん…大丈夫か？」

見れば　今度はルナさんが扉をあけていた。

「ああ、はい。大丈夫ですよ。」

俺は扉でぶつけた額を擦りながら答える。くちばしも痛い…

「まあ、入ってくれ。」

リーフさんの時とは違い、ルナさんは扉を開いて俺を先に入れてくれた。

「リビングにみんな集まってるから。」

俺は毎回この廊下が死への路径に見えて仕方ないのだが…今年も大変なクリスマスになりそうだ…。

「こんばんは」

リビングに入ると、ストラさんだけが律儀に俺に挨拶してくれる。他のみんなはというと、テレビゲームに熱中していた。

「レイク？もつといじめてあげるよ」

「ひい！ルナさん、早く戻ってきてー！」

どうやら戦争ゲームでもしているようだ、テレビ画面では1人の女兵士がナイフを振り回しながら　無駄撃ちして弾が無くなったのであろう弾数0の男に迫っている。…ってリーフさん、さっきまで玄関にいなかったっけ！？

「相変わらず皆さん、お元気ですね…」

「はははっ…元気過ぎるくらいだよ」

ストラさんが苦笑しながら答える。

「わあー！」

あつ、遂にテレビ画面の女兵士がナイフを投げはじめた。

「きゃー！」

アクアさんも、口ではああ叫びながらもゲーム画面上ではバルカン砲 乱射してますけど… あつ、バルカン砲の餌食に… あゝあゝあゝ。

「勝利♪」

「やったー」

♀ 2人が異常に怖いです。ハイ。

「あつ、ルナ…！あとはルナだけだよ？」

リーフさんはリビングに戻ってきたルナさんに気付き、声をかける。ルナさんはいったんテレビ画面に向かおうとするが、俺の方を向きニヤツと怪しく笑う。

「ここは“サンタさん”にやってもらうべきじゃないかな？」

「そうだね、やってみたら？」

うつ、さつきまで優しくかつた筈のストラさんまで… 仕方ない、ここは空気をよんでやるべきか。

「わかりました。」

「じゃあ、ルナ。説明よろしく！」

「俺に丸投げした！？このゲーム作ったのお前だろ！？」

リーフさんがこのゲーム作ったんだ… どうやって！？

更にリーフさんは驚きの発言を…

「私、これから武器集めするの！いたぶれるようにね♪」

鬼だ！この人、鬼だ！初心者にも心遣いなし！？

「まあいいか…。じゃあ、説明するね。」

納得した！？

「まず、これつけて。」

ルナさんはメガネみたいな物を取り出す。

「これは？」

「モーションセンサー付きメガネ。向いた方向に視点が移動。」

製作者1人なのにハイクオリティだー！？

「このマットを使って移動。重心が傾いた方向にキャラが移動する。」

マツトを1回蹴ると回転回避、両足離すとジャンプする。更に、側転や後方宙返りや…」

「もういいや…銃の撃ち方だけ教えて…。」

「手首を手前に引けばいい。足下のタッチパネルで武器チェンね。」
「そこまでセンサー凄いいんだ…あまりのハイクオリティさに疲れてきた…。だけどゲームで負ける訳にはいかない！クリスマスが始まる前は子供達へのプレゼント用のゲームで遊び呆けているのだから…！俺はテレビ画面の前に立つ。」

「3分間まつてやる…。」

「待つてくれるんだ！？」

まあいい、まずは地形の把握と拠点、武器の確保だ…街みたいな地形だから対人用地雷でもあると罠を仕掛けやすいな。
俺は1つの民家に拠点を決める。

「何か武器ないかな…。」

タンスを殴つて壊すと、中からロケットランチャーが出てきた。

「なんで一般市民が重火力兵器もってるの！？」

まあ、これは窓から撃てばいいか…。ご丁寧に弾薬箱まで出てきたし…

「3分間待つた、時間だ！答えを聞こう…。」

えっ！もう3分経つた！？絶対経つてないだろ…！！

迎撃準備を調える為、ドアを開けるとそこには返り血により紅く染まった女兵士が…。

「でたあー！！！！」

「ふふっ…。」

今度はスタンロッド持つてる！？

俺はこんな狭い部屋でランチャーを放つ訳にもいかず、部屋の窓から離脱しようと試みた…のだが

「あはは…。」

ビシュン！

スタンロッドに当たってしまった。電撃が飛び散り、キャラが気絶

する。

あれ？気絶したってことは終わり？良かった。

俺は安心してしていると、女兵士が俺のキャラをキックして、叩き起す。

あつ、起きるな！マイキャラよ！

「ていつ」

バシユン！

電撃が飛び散り、再び俺のキャラは気絶する。

あの、泣いていいですか？この状況…

「……………」。

「楽しかった」

俺は体操座りで落ち込んでいるが、リーフさんはとてもご機嫌な様子です。

「というわけで、良い子のみんなにプレゼントを」

あれだけいたぶっておいて良い子宣言ですか…幸せな子だ…。

だが、俺もプロだ！仕事はしっかり果たす！

俺は白い袋の中をあさって、1つ目のプレゼントを取り出す。

「えっと…まずストラさんですね。」

「ありがとうございます！」

ストラさんは満面の笑みを返してくれる。俺は心のシャッターで今の可愛さを永久保存することに決めた。

「次は…リーフさんです。」

「ありがとうございます」

リーフさんも普段は可愛いのに…さっきは怖かったなあ…。…足が震えてきた。

「リーは何を頼んだの？」

「うーんとね、おもちゃ」

「玩具？」

「おもちゃねえ…」

「…／／／／」

ルナさんは意味ありげに呟いてるし、レイクさんは頬を紅に染めている。アクアさんだけがこの状況を把握出来ていないようで頭に疑問符を浮かべている。

「これは…ルナさんのプレゼントですね。」

「ありがとう。」

ルナさんは俺からプレゼントを受け取る。隣でアルトさんがプレゼントを凝視しているのだが…

「なに頼んだの？」

「うん？技マシンを幾つかね。」

「そう…よかった…。」

「あつ、ゴメン、今の聞き取れなかったんだけど…」

「いや、何でもないよ！」

アクアさんだけがまた状況を理解出来ず、その頭上に更に疑問符が浮かべている。

「レイお嬢様、此方が本年度のクリスマスプレゼントでございます。」

「

「その呼び方やめてくれる？」

面白いからやめる訳ないじゃん。レイクさんは女の子扱いされる時はレイって呼ばれてるらしい。

昨年度のクリスマスにライトさんから聞いた。

俺はまた白い袋の中をあさる。

「アルトさんへのプレゼントです。」

女の子扱いされて不機嫌になっているレイクさんは放っておいて、アルトさんにプレゼントを渡す。

「ありがとう。」

この子も強がりな所があつて不便だなあ…すれ違いも多くて大変そうだし。

「アルトは何を頼んだの？」

「ひつ、秘密よ！」

別に秘密にするような物だったっけな？ まあ、いいけど…

俺はもう1つ、プレゼントの包みを取り出す。

「はい、アクアさんのプレゼントです。」

「ありがとうございます！」

「ねえ、アクアは何頼んだの？」

「秘密です！」

確かにこの子のは秘密にしとくべきかな…リーフさんにかかわれそうだし。あと1つ残ってるなあ…最後はあの子か、はあ…。

俺は抑えきれなくなったため息を吐き出す。

「あとはライトに渡せばミッションコンプリートだね。」

やめてくれその言い方！さっきのゲーム思い出すから。

「じゃあ、行ってきます…あとこれ、新しい日記帳です。」

「どうも。」

俺はまるで、これが未来の俺の遺物であるかの様に日記帳を渡す。

「今年もストラが日記つけるんだよね。」

「今年はみんなにつけてもらおうかな？」

「ええ…。」

俺はそんな他愛もない会話をしているみんなの声を聞きながらリビングをあとにする。

ライトさんの部屋は2階に上がったところの廊下を左、そしてまた左に…あった。

ドアに“ライト”って書かれた木製のかけ札が掛かっているから間違いないだろう…何回もこの部屋に来てるけど。

俺はライトさんが起きないようにそっとドアをあける。

「すう…すう…。」

よかった、寝てるから今の内に…。

俺はベッドの近くに寄って靴下を探す…がない。

「ライトさんが忘れる訳な…」

そこまで言ったところで俺は気付いた。ライトさんが両手で靴下を抱いてることに！

「仕方ない…」

俺はライトさんから靴下を獲ろうとする。

「むにゃ…」

起きないように…

「ばぁーん!!」

ビクッ!

……ってあれ?もしかして寝言?

ライトさんは起きてこないし、たぶん寝言だったのだろう。全く、毎回心臓に悪いよ…前はベッドから落ちて転がりまくったし。

全く、毎回心臓に悪いよ…前はベッドから落ちて転がりまくったし。

「よいしょっと…」

ミッシヨンコンプリート!これより帰還する!

俺は意気揚々と部屋から出ていく。

…にしても何だか微笑ましかったな。これだからサンタさんはやめられない。

俺はプレゼントを抱いて、幸せそうに寝ているライトさんをみてそう思ったのだった…

—————。

「それでは、失礼します。」

「またね〜」

みんなと玄関で別れの挨拶をして、俺は次の家に向かう。幸い、そこまで離れていないので わざわざ空を飛ばなくてもよさそうだ。俺は雪の降る中歩いていると、誰かから声をかけられた。

「ちよつといいかな?」

「ストラさん?」

後ろを振り向くと、そこには以外にもストラさんがいた。

「今日はありがとね。」

「いえ、サンタさんとして当然ですから。」

「また今回もライトが変なお願いしたんでしょ？」

「ええ…まあ」

今回の注文も酷かったなあ、プレゼント出来ないかとも思ったぐらいに。

「そういえば、ストラさんって彼氏いるんですか？」

「な、何ですか！？急に！」

「いえ、あの家の中で噂になってるようですし…」

焦ったストラさんも可愛いなあ…なんて思ってる俺がいる。

「ああ、あれ？僕には彼氏はいないよ。みんなの世話に忙しくてね。」

確かにあのメンバーならストラさんも大変だろうな…

「僕も彼氏欲しいよ…」

近くに俺という♂がいるのに全く眼中にない！？

「つまらない話 聞かせてごめんね。とにかく、今日はありがとう。また来年ね！」

そう言つて、ストラさんは走り去って行く。

ああ…機会が、ストラさんと会える機会がまた来年に！

「はああ…」

やっぱり疲れるかも…クリスマス。

俺の恋心は暖かい日の初雪の様にあっけなく溶け消えそうでした…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7600z/>

記憶になった日常

2011年12月28日02時51分発行